

かかりつけ薬剤師を支援する薬局DX環境の整備と推進に関する 調査研究

(一社)品川区薬剤師会 会長 加藤 肇

はじめに

かかりつけ薬剤師、薬局が普及しない理由を分析し、かかりつけ薬局・薬剤師の普及策を検討した。また、かかりつけ薬剤師を支援する医療 DX 化を推進するため、薬局に必要なとされる情報連携支援ツールを調査研究し、地域包括ケアシステムの中で薬剤師が DX 化の推進に果たすべき役割について検討した。

I 調査研究の背景と目的

2015年10月、厚生労働省は「患者のための薬局ビジョン」を発表し、薬局薬剤師の役割強化を提唱した。このビジョンでは、「かかりつけ薬局」と「地域包括ケアシステム」への薬剤師の貢献が重要視されている。国民の健康管理や医療ケアの充実を図るためには、患者に身近なかかりつけ薬局・薬剤師の活用が不可欠であり、その活躍の場を広げることが求められている。

「地域医療」における連携は、医薬連携や薬業連携など、医療従事者間で少しずつ進展しているが、専門的な薬学知識を持たない患者と薬剤師との連携はまだ十分ではない。薬剤師と患者の連携（以下、薬患連携）には、患者の立場に立った薬剤師とのコミュニケーションシステムが不可欠である。特に、長期処方箋やリフィル処方箋など、継続的な服薬患者に対する服薬指導の重要性が増す中で、患者の健康状態を把握するためには、薬剤師の経験や勘に頼ることなく、AIなどを活用した薬患コミュニケーションシステムやデジタル診断支援ツールの開発、電子データの取得・管理が必要とされている。この課題の解決には、DXの進展と普及が不可欠であり、薬剤師には講習会などを通じて先端のAIやICT技術を学ぶとともに、患者に医療・薬剤DXの利用方法をわかりやすく伝え、その活用を促す「DXの伝道師」としての役割が期待される。将来的には、薬剤師（薬局）は患者との連携のみならず、健康な人とも連携し、かかりつけ薬剤師が国民の健康維持・増進、病の予防に寄与することが期待されている。ウェアラブル端末から継続的にバイタルデータが送られるようになり、薬歴、病歴、検査データと連結して保管・管理ができれば、国民の健康にとってますます重要になる。

一方、新技術振興渡辺記念会「科学技術調査研究助成」（交付番号 R5-572 申請代表者：細江智夫）の星薬科大学薬学生に対するアンケート調査結果では、97.9%の学生が医療DXを推進すべきと考え、66.5%の学生が薬剤師を「医療DX」の推進役として活用すべきとの回答を得た。しかし、医療DXについて「具体的な内容まで知っている」「ある程度知っている」との回答は31%と低く、46.3%の学生が薬学部の医療DX教育が十分でないと感じていた。この結果から、薬学生に医療DXの今後の進むべき方向や、その中での薬剤師の役割について適切な教育を行っていく必要性が示唆された。

本調査研究の目的は、「地域包括ケアシステム」の中で現場（薬局薬剤師）が感じている薬局 DX 化の具体的な課題や問題点をアンケートやヒアリング等の手法を用いて抽出・整理し、関連する分野の専門家とともに、薬剤師を軸とした患者やその家族・介護関係者・医師等との具体的なコミュニケーション支援ツールを調査研究、検討することである。さらに、情報コンテンツの利用に関する将来像について、その効果を分析するとともに、これらの課題に対する大学の薬学教育の現状を調査し、今後の課題や対応について、国、自治体や関連団体、あるいは大学教育機関等へ提言することである。

II 調査研究の結果と今後の課題

II-1. 調査研究の結果

かかりつけ薬剤師と薬局の普及に関する調査研究では、以下のことが明らかになった。

現在、かかりつけ医師は国民の 70%が利用しているのに対し、今回のアンケート結果では、薬剤師の半数以上がかかりつけ薬剤師であるにもかかわらず、その利用は 10%程度であった。このままでは、2025 年までに全薬局がかかりつけ薬局となることを目指す「患者に寄り添う薬局ビジョン」の実現は困難である。

普及しない理由として、薬剤師が処方箋と過去の薬歴しか見ることができず、患者の全体像を把握できないことや、かかりつけ薬剤師の業務を適正に行うには時間がかかり、現状の業務体制では対人対応の時間確保が難しいため、患者と薬剤師の双方にメリットが感じられにくいことが挙げられる。さらに、薬剤師の教育や研修が十分でないため、最新の医療 DX 技術を活用するスキルが不足していることも問題である。しかしながら、超高齢化社会における医療介護問題を前に、かかりつけ薬局薬剤師の重要性は増しており、特定の個人や患者だけでなく、広く普及させる必要がある。

一方、医療 DX 教育について、全国の薬学部に対する医療 DX に関する予備調査とアンケート調査を実施した結果、以下のことが明らかになった。

予備調査として、web 検索を通じて、全国の薬学部のシラバスを調査した結果、80 学部中 9 学部で医療 DX に関する記載が確認されたが、医療 DX を扱うのは 1 コマ程度であった。予備調査の結果に基づき、全国薬学部の担当者に対し実際の授業内容についてアンケート調査した。その結果、全国の薬学部では医療 DX に関する教育が一部で行われているものの、全体的にはまだ整備が不十分であることが明らかになった。

II-2. 今後の課題

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

1. **薬剤師と患者との連携（薬患連携）の構築：** これまでの取り組みは、主に医療提供者側の連携に焦点を当てており、患者との連携が不十分であった。薬局が単なる薬の受け取り場所ではなく、地域住民の健康を守るための拠点として機能するためには、薬剤師と患

者の間の信頼を築く薬患連携が不可欠である。

2. 「患者に寄り添うかかりつけ薬剤師」の普及：「薬患連携」という新しい取り組みを推進していくためには、患者の健康状態を継続的に把握する役割を担う「患者に寄り添うかかりつけ薬剤師・薬局」を普及させていく必要がある。
3. 薬剤師と患者のコミュニケーション支援システムの開発・普及：薬剤師と患者のコミュニケーション（薬患連携）を強化するためのシステムやツールの開発が必要である。これには、個人向け AI、オンライン相談システムやリモートモニタリングシステムなどが含まれる。また、薬剤師の業務負担を軽減し、薬剤師が対人で丁寧な対応を行うための時間的な余裕を確保するため、業務の効率化も必要である。
4. 医療情報ネットワークの構築：薬剤師が患者の全体像を把握するための情報連携支援システムの開発が必要である。これには、電子カルテやバイタルデータの共有システム、AI を活用した診断支援ツールなどが含まれる。全国ネットワークとともに、柔軟で地域に即した対応が可能となる分散型の地域医療情報ネットワークの構築も重要である。
5. 地域包括ケアシステム、パーソナルヘルスケアの推進：地域包括ケアシステムの中で“薬剤師が果たすべき役割”を明確にし、他の医療従事者との連携を強化することが必要である。これには、地域の医療機関や介護施設との情報共有システムの構築が含まれる。また、ウェアラブル機器、医療情報ネットワークとの連結、個人向け AI を活用したパーソナルヘルスケアの推進も求められている。
6. 医療 DX 教育・研修・講習会の充実：薬剤師は、講習会などを通じて先端の AI や ICT 技術を学ぶとともに、患者に医療 DX の利用方法をわかりやすく伝え、その活用を促す「DX の伝道師」としての役割が期待される。具体的には、AI や ICT 技術の基礎知識を学ぶだけでなく、デジタル医療やデジタル治療など実際の現場での応用方法を学ぶ機会を増やすことが重要である。一方、“将来の薬剤師”である薬学生に対する医療 DX 教育を充実させ、卒後、薬局で活用できる最新の知識と技術を修得させることが必要である。また、小中高生、一般市民や高齢者向けの医療 DX の説明会、講習会も必要である。
7. 政策提言と実施：調査研究の結果を基に、自治体や関連団体、大学教育機関等に対して具体的な政策提言を行い、その実施を促進することが求められる。これにより、かかりつけ薬剤師の普及と医療 DX の推進が期待される。

国民の健康寿命が延び、平均寿命との差が縮小すれば、医療介護費用が削減される。さらに、健康で就業可能な高齢者が労働人口に加われば、「支える人が増え、支えてもらう人が減る」ことになり、超高齢化社会が到来する中で、現在の社会保障レベルを維持・向上させることも、夢ではない。このビジョンの達成には“医療 DX”の推進が必要であり、その使命を担う人材として薬剤師の役割は大きく、かかりつけ薬局薬剤師を“健康寿命増進の柱”と位置づけて、広く国民に認識してもらうことが必要である。そのためには現行の薬剤師法を改正し、健康長寿社会の実現に向けた薬剤師の役割を、新たに明記にすることを提言する。